

研究ノート

単身生活者の動向

—1980年および1990年の比較—

山本 千鶴子

1. はじめに

1975年以降「単独世帯化の時代」といわれて¹⁾から久しい。その当初に比べて、最近では出生率の低下が見られ、人口高齢化が更に進み、平均世帯規模がひき続き縮小している。このような状況の中におかれている単身生活者はそれらと無関係であるとは言い難い。そこで、本稿は1980年および1990年の単身生活者の動向についての検討を行うことを目的とする。

なお、ここで使用する単身生活者とは、『国勢調査』で使用している「1人の一般世帯」および「施設等の世帯人員」の合計とする。

2. 単身生活者の動向

1) 単身生活者数の推移

表1は、1960年から1990年までの単身生活者数および総人口に占める割合を示したものである。単身生活者は1960年の450万人から90年の1,110万人へと、30年の間に660万人増加した。その中で1人の一般世帯員は360万人から940万人へと、約580万人近く増え、施設等の世帯員は90万人から170万人へと約80万人の増加を示している。また、1960年を100とした場合の1990年の指数は、総人口131、単

表1 単身生活者の年次推移

(単位：千人)

年次	総人口	単身生活者	1人の一般世帯員	施設等の世帯員	総人口に占める割合 (%)		
					単身生活者	1人の一般世帯員	施設等の世帯員
1960年	94,302	4,523	3,576	948	4.80	3.79	1.00
1970	104,665	7,420	6,097	1,323	7.09	5.83	1.26
1975	111,940	8,063	6,532	1,531	7.20	5.84	1.37
1980	117,060	8,644	7,105	1,538	7.38	6.07	1.31
1985	121,049	9,568	7,895	1,674	7.90	6.52	1.38
1990	123,611	11,129	9,390	1,740	9.00	7.60	1.41

出所：国勢調査

1) 伊藤達也、『世帯構成とその地域性』、『昭和60年国勢調査モノグラフシリーズ, No.9』, 日本統計協会, 1990年3月, p.33.

表2 居住世帯別单身生活者の比較：1980，90年

(単位：千人，%)

居住世帯別单身生活者	1980年		1990年		1980～90年	
	実数	割合	実数	割合	増加数	割合
総人口	117,060	100.00	123,611	100.00	6,551	100.00
2人以上の世帯の人員	108,417	92.62	112,156	90.73	3,739	57.08
单身生活者	8,644	7.38	11,129	9.00	2,485	37.94
1人の一般世帯員	7,105	6.07	9,390	7.60	2,284	34.87
施設等の世帯員	1,538	1.31	1,740	1.41	201	3.07
单身生活者	8,644	100.00	11,129	100.00	2,485	100.00
1人の一般世帯員	7,105	82.20	9,390	84.37	2,284	91.91
施設等の世帯員	1,538	17.80	1,740	15.63	201	8.09
寮・寄宿舎の学生・生徒	354	4.10	331	2.97	-23	-0.94
病院・療養所の入院者	596	6.89	737	6.62	141	5.67
社会施設の入所者	301	3.49	434	3.90	132	5.33
自衛隊営舎内居住者	117	1.35	121	1.09	5	0.19
矯正施設の入所者	50	0.58	49	0.44	-1	-0.04
その他	118	1.37	68	0.61	-51	-2.04
再掲						
病院・療養所・社会施設の入所者	897	10.38	1,170	10.52	273	10.99

出所：国勢調査

单身生活者246，1人の一般世帯員263，施設等で生活している世帯員184である。その結果，総人口に占める单身生活者の割合は，1960年の5%から1990年の9%へ，1人の一般世帯員は4%から8%へとその割合を拡大している。しかし，施設等の世帯員はいずれの年次も約1%の割合で，1人の一般世帯員に比べてその変化は小さい。

2) 单身生活者の居住している世帯

次に单身生活者が居住している世帯を見るために，居住世帯別单身生活者を示したものが表2である。单身生活者はこの10年間に，おおよそ250万人の増加を示しているおり，その内の9割にあたる230万人は1人の一般世帯で増加し，残り1割，20万人は施設等の世帯での増加である。施設等の世帯ではその種類によって，居住者が増加したものと減少したものとがある。増加したのは病院・療養所の入院者，社会施設の入所者および自衛隊営舎内居住者である。減少したのは，寮・寄宿舎の学生生徒，矯正施設の入所者およびその他の人たちである。このような中で，病院・療養所の入院者，社会施設の入所者の合計は，1980年の90万人から1990年の120万人へと，約30万人の増加を示している。しかし，单身生活者全体に占める割合は1980年，90年の両年次とも約1割と変化がない。したがって，この間の増加はこれらの施設へ入所する割合が増えたのではなく，人口が増えたことによる増加であると見ることができる。

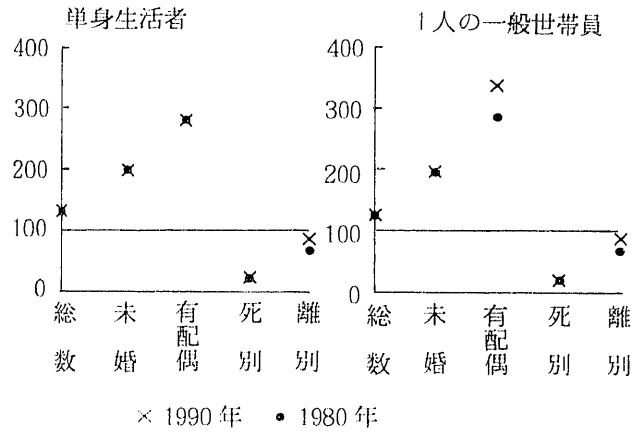
以上のように，1980年から1990年にかけて，单身生活者の増加の大部分は1人の一般世帯での増加であった。そのため，以下については单身生活者および1人の一般世帯についての検討を行うことにする。

3) 単身生活者の性比

今までの研究²⁾によれば、単身生活者は、女子より男子が多いと言われている。そこで最近の単身生活者および1人の一般世帯員の性比³⁾を、配偶関係別に示した(図1参照)。

単身生活者は、離別者以外は、1980年と1990年の印が重なっているのではほぼ同じ傾向を示している。詳細にみれば、単身生活者の1980年は129、1990年は124で1990年の方が、少し小さくなっている。しかし、未婚者では1980年の194から1990年には197へとやや大きくなり、有配偶者も同様の傾向を示している。死別者は両年次とも21で変わらないが、離別者は80から98となり、男子と女子の数がほぼ同数近くなってきている。また、1人の一般世帯員は、総数では両年次とも126と変化はなく、未婚者、死別者、離別者は単身生活者の性比と同じような変化を示している。しかし、有配偶者は単身生活者全体の性比より1人の一般世帯員のほうが高く、1980年の289から1990年の336へと、男子は女子の3倍以上も多い。以上のように単身生活者および1人の一般世帯員の性比は100を超えており、女子より男子が多く、未婚者、有配偶者も同様である。しかし、死別者では女子の方が男子より多く、離別者はほぼ同数近くとなっている。

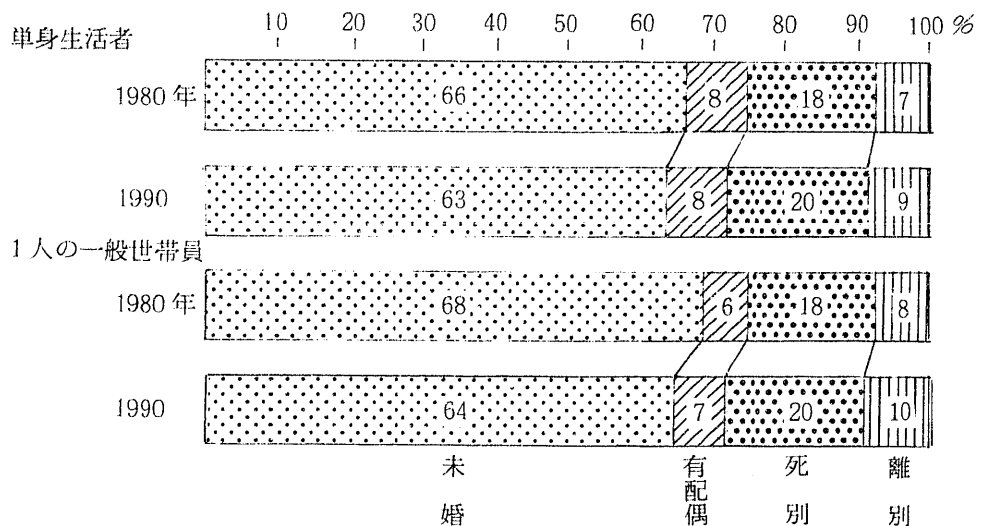
図1 単身生活者の性比：1980、90年



4) 単身生活者の男女別、配偶関係別割合

図2は単身生活者および1人の一般世帯員をそれぞれ100とした場合の、1980年と1990年の配偶関係別割合を示したものである。両年次とも未婚者の割合が7割弱で一番多く、次いで死別者が2割、有配偶者と離別者がそれぞれ1割弱となっている。1990年は1980年より未婚者がややその割合を減じ、それだけ死別者と離

図2 単身生活者の配偶関係別割合：1980、90年 男女計



2) 山本千鶴子, 「単身生活者」の動向, 『人口問題研究』, 第170号, 1984年4月, pp.51-54.

濱英彦, 「単身世帯の意義と動向」, 『住宅』, Vol.34, 1985年, pp.9-14.

伊藤達也, 「単身世帯の動向」, 『統計』, 第40巻8号, 1989年, pp.4-9.

3) 周知のように、性比は総人口に占める男、女人口それぞれの割合である。ここでは女子人口を100とした場合の男子人口の割合で表している。

別者が増えている。
この傾向は1人の一般世帯でも同様である。このように1980年と1990年では少し変化があったが、単身生活者と1人の一般世帯員の配偶関係は比較的安定しているということがいえる。

図3は、1990年について男女別に配偶関係別割合をみたもので、男子と女子とでは配偶関係別割合が異なっている。男子の単身生活者では未婚者が一番多く8割弱、次いで有配偶者が1割、死別者と離別者はそれぞれ1割弱である。女子の単身生活者では未婚者割合は5割弱、死別者は4割、離別者は1割、残りは有配偶者となっている。

以上のように男子では未婚単身生活者がそのほとんどで、女子では未婚単身生活者が約半数、死別単身生活者が4割となっており、男子と女子とでは配偶関係別構造が大きく異なっている。

5) 配偶関係別、高齢単身生活者の割合

表3は、単身生活者総数に対する65歳以上の割合を、男女別、配偶関係別に示したものである。男女計では、1980年の15%から1990年の20%へと、その割合は増えている。また、男女別にみると、男子の高齢者割合は7%から8%になったのにすぎないが、女子は24%から35%となり、高齢化の度合いは女子の方が一段と進んでいる。さらに、配偶関係別にみると、死別者で一番高齢化が進んでおり、1980年の63%から1990年の75%へとそのシェアを拡大し、死別単身生活者4人のうち3人までが65歳以上の者となっている⁴⁾。有配偶単身生活者では19%から24%、離別単身生活者では14%から19%とい

図3 単身生活者の男女別配偶関係別割合：1990年

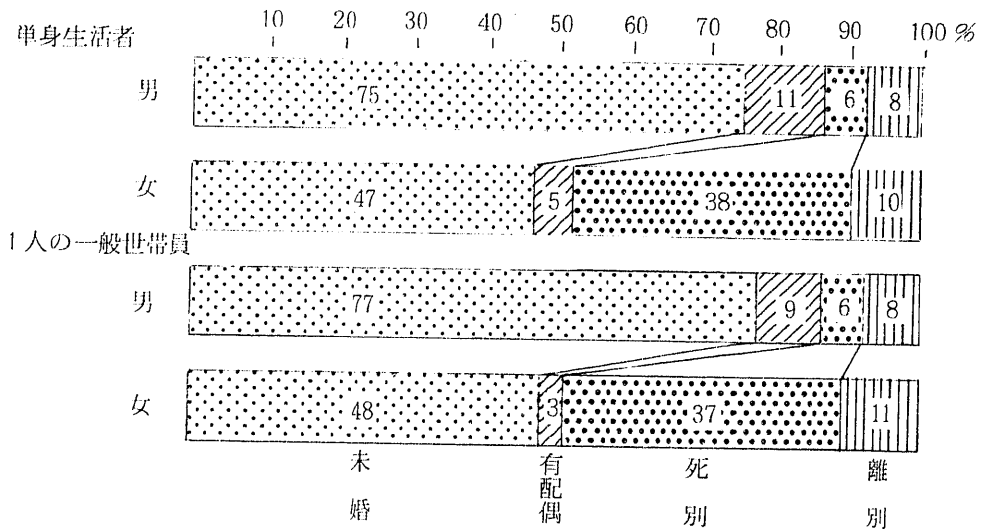


表3 配偶関係別高齢単身生活者の割合 - 1980年, 90年 - (%)

年次	総数	未 婚	有配偶	死 別	離 別
単 身 生 活 者					
男女計					
1980年	14.57	1.11	19.18	62.53	14.27
1990	20.32	2.48	23.66	74.75	18.54
男					
1980年	6.87	0.61	16.70	68.59	13.29
1990	8.22	1.01	18.58	70.86	12.60
女					
1980年	24.48	2.07	26.01	61.24	15.06
1990	35.34	5.37	37.82	75.55	24.37
1 人 の 一 般 世 帯					
男女計					
1980年	12.38	0.81	9.70	57.15	11.80
1990	17.35	1.93	11.10	70.26	16.16
男					
1980年	4.85	0.34	7.74	63.81	10.70
1990	5.91	0.58	7.61	66.33	10.33
女					
1980年	21.87	1.71	15.36	55.89	12.60
1990	31.75	4.63	22.79	71.05	21.63

注) それぞれの単身生活者総数を100とした場合、65歳以上の者が占める割合。

4) 配偶者と死別する確率は高年齢になるほど高くなるため、高齢化が進んでいるのは当然のことである。その上に、死別再婚率は離別再婚率より低い値となっているのではないかとと思われる。ちなみに1990年の死別再婚率(死別人口千対)は男子5.49%、女子0.49%、離別再婚率(離別人口千対)は男子99.77%、女子48.39%である。

れも高齢化が進んでいるが、死別単身生活者ほどではない。しかし、有配偶者単身生活者や死別単身生活者の4～5人に1人の割合で高齢者が生活しているのである。また、1人の一般世帯員での高齢化は、単身生活者全体よりやや低い値となっている。このことは、施設等の世帯で一段と高齢化が進んでいることを意味している⁵⁾。

6) 男女、年齢、配偶関係別単身生活者

図4、図5にはそれぞれ1980年と1990年の配偶関係別単身生活者の人口ピラミッドを示している。一瞥して、1990年は1980年に比べて、中年の男女の未婚者および高年齢の女子の死別者の増加が顕著であることがわかる。そこで、この2つのカテゴリーを中心に、もう少し詳しくみてみよう。

1980年から1990年にかけて単身生活者が250万人増加していることはすでにみてきた。その中の未婚者について、男女計の未婚者の単身生活者は1980年が570万人、1990年が680万人でその間に110万人の増加であった。その内の53万人は、35～49歳における増加で、それより若い20～34歳は30万人の増加を示している。その結果、1990年には35～49歳の単身生活者は120万人、20～34歳は400万人となり、1990年は1980年と同様に20～34歳のほうが単身生活者数は多くなっている。しかし、年齢別構成割合では1980年の20～34歳は66%から1990年には59%へと小さくなっているが、35～49歳は11%から17%へとその割合を拡大している。数の上ではまだ20～34歳の方がずっと多いが、年齢別構成割合では35～49歳の割合が増えてきている。その結果、未婚単身生活者の中年化が進行していると言える。

また、70歳以上の女子の死別者は、1980年の53万人から1990年の106万人へと、2倍の増加を示している。この増加数は、先に述べた未婚の男女計の35～49歳の増加数53万人に匹敵し、女子の死別の70歳以上の増加がいかに大きいものであるかわかる。なお、それ以外には男子も女子も40歳以上の中高年の離別者の増加が大きく、増加数全体に占める割合は約14%であった。以上見てきたように、1980年から1990年にかけての単身生活者の増加は、未婚の中年男女および死別の高齢女子、そして離別の中高年の男女の単身生活者の増加によるものがその大部分を占めている。

図4 単身生活者の人口ピラミッド：1980年

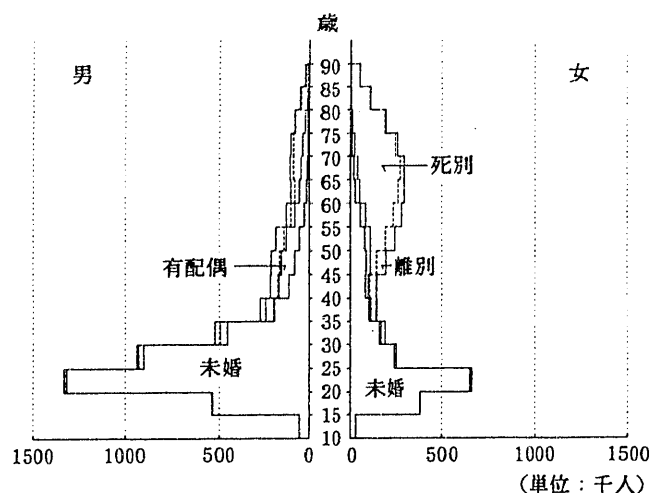
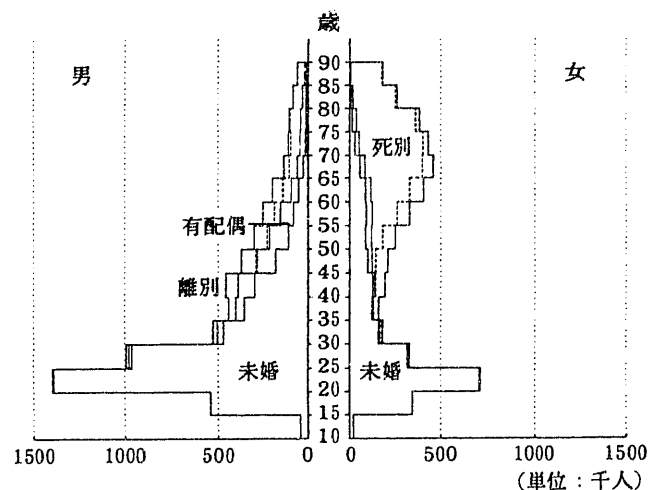


図5 単身生活者の人口ピラミッド：1990年



5) 例えば、1990年の施設等の世帯の女子の単身生活者について見てみると、離別者ではその96%、未婚者では約54%、死別者では62%が高齢者である。

3. まとめ

以上述べてきたことをまとめてみると次のようになる。単身生活者の増加はほとんどが1人の一般世帯員の増加によるもので、男子が女子より多く、未婚者および有配偶者も、同様である。しかし、死別者および離別者は逆に女子の方が男子より多い。また、男子と女子との配偶関係別構造は大きく異なり、男子は未婚者がそのほとんどを占めているが、女子では未婚者の割合が一番大きく、次いで死別者の割合が大きい。単身生活者の高齢化は総人口に比べてさらに一層進行しており、特に女子の死別者では、1人暮らしの高齢者が圧倒的に多い。1980年から1990年にかけての単身生活者の増加の半数近くは、未婚の中年男女および死別高齢女子、離別の中高年の単身生活者によるものであるといえる。